

百穂君の藝術

松林桂月

平福百穂君が、亡くなられた数日前に筆と
 そつたと云つて、あの内満を人格そのものの
 やうな丸い顔に微笑を浮かべながら、頬を撫で
 撫で、私のところへ見せに来たが、滑舌か
 の知らせとでも云ふのであううか、思へば不
 思議なことであつた。

「文は人なり」と云ふ諺があるが、珍高きま
 た、繪は人なり」とと断言することを出来る。

殊に百穂君の繪を見ると、あの人の香氣の高
 い情熱が畫面の底に籠つておいて、さらさらと
 描き流されおるうちに、見れば見るほど深
 い味はいか出て来るやうである。祖父、父、
 百穂君と云ふ風に丹青が家の業であつたせい
 もあらうか、百穂君が十三の時に書いたと云
 ふ「寒念佛」を今年夏の展覧会で見て、その出
 来栄えの美事なのに感服した。「梅檀は双葉な
 からに香人ばし」とか、「名優は初舞台に於て
 既にその片鱗を現す」とかよく云ふか、本統